

治療者に怒りを向けてくる非行少年との面接過程

－ 三角形の構図を維持するための工夫について －

川端 壮康*・菅原 正和**

The psycho therapeutic process of a delinquen girl who direct her anger toward therapist

－ to keep triangle composition in psychotherapy －

Takeyasu Kawabata, Masakazu Sugawara

本論文では、児童自立支援施設において行った心理療法の過程について報告する。対象児童は中学3年生の女児であったが、面接に対して拒否的で、治療者に対して強い怒りを向けてきたため、心理療法を成立させることが困難であった。そこで、治療者と対象者が一対一の対立・対決するような構図にならないよう、施設の担当職員を加えた3人でコラージュ作成を行うという面接構造に切り替えたところ、以後はスムーズに面接が進み、最終回には自己の気持ちを見事に表現するような作品を作成するまでに到った。これは、対象者が二者関係の病理を持っており、情緒や社会性の発達が未熟あるいはアンバランスであるため、言葉による操作のみでは「テーマについて話し合う」という神田橋（2000）のいう治療における三角形の構図を維持することができないところ、コラージュと施設の担当職員という二つの実体的な第三の媒介を面接に取り入れることで、治療における三角形の構図を作り出し・維持することができたためと考えられる。

キーワード：非行臨床、コラージュ、三角形の構図

1 犯罪・非行臨床における三角形の構図

犯罪・非行臨床においては、対象者（以下、心理療法の対象者をこう呼ぶ）が、治療者に対して、反発したり攻撃的な感情を向けてきたりすることがよくある。面接が進む中で、いわゆる転移等によってこうしたことが起こるのではなく、最初の段階から対象者が治療者に対して敵意を向けてくることが少なくないのである。

これは、犯罪・非行臨床において、治療者は、「援助者」と「権威の一端を担う者」という二重の役割を担わざるを得ないことから考えると考えられる（例えば、藤岡、2007；生島、1999；遠山、1995）。つまり、対象者にとって治療者は、援助を申し出ている者であると同時に、本人が望んだわけでもない面接を強要するなどしている法的強制力や権威の象徴でもあるため、それらに対する反発や怒りが、面接の最初から治療者に対して向けられるといえるだろう。

多くの治療者は、このような場面につつかると、経験的に「権威を面接者の外に置くこと」（藤

2010年4月10日受理

* 尚綱学院大学 講師

** 尚綱学院大学 教授

掛、2002、P.112) を行っている。つまり、「あなたの気持ちはわかるが、××(対象者が怒っている内容)は、私にもどうしようもないんです。」など、怒りの対象である権威を治療者の外に置こうとするのである。それでもなお、「××について、先生自身はおかしいと思わないんですか(「おかしいと思うなら、なんとかしろ」という含みがある)。」などと迫ってくる者には、「個人的にはあなたの気持ちはわからないでもないが、組織の一員である自分としては、××は仕方がないことと思う。」などと、自己の役割の二重性に対応する形で、「個人(治療者)としてのわたし」と、「組織の一員であるわたし」に自己を二つに分け、「個人(治療者)としてのわたし」が「組織の一員であるわたし」を話題にすることで、対象者が攻撃的感情を向けている権威を治療者の外に置くこともよく行われている。

こうした治療的操作について、神田橋は「三角形の構図を作る」(神田橋、2000、P.125)という言葉で表している。神田橋(1997)は、対人関係は、母子を原型とする二者関係から三者関係へと発展するのであり、心理療法における治療者と対象者との関係もこうした発達過程を背後に隠し持っていることを指摘している。すなわち、対話による心理療法では、通常、治療者と対象者が主訴等の話題について語り合うという三角形の構図を有するが、これは「話題」という「言葉」が第三者の位置にあるという意味で、二者関係と三者関係との中間的な段階にあるのだという。そして、神田橋(1990)は、この治療者と対象者との関係は、対象者の病理に応じて変わるべきであるが、あくまでも基本は三角形の構図であり、どうしても必要な場合にのみ二者関係の面接を行うべきであると述べている。そして、そのような場合でも、治療者は、常に対象者との関係に注意を払い、三角形の対話の芽を見つけてそれを根気強く育てていくことが大切と述べている。上に述べたような、犯罪・非行臨床において対象者が治療者に対して強い攻撃的感情を向けてくるような場面において、治療者と対象者は、まさしく二者関係に陥っているということが可能であり、「権威を面接者の外に置くこと」は、三角形の構図を作ろうとする試みととらえることができるだろう。

2 児童自立支援施設での心理療法の経験から

筆者は児童自立支援施設において、嘱託医(精神科医)の指示の下、問題のある児童に対して心理療法を行うという経験を持つことができた。筆者が担当したのは、発達障害その他の障害により精神科を受診中の者が大部分であり、施設の中でも問題を起こすなど、いわゆる処遇困難児たちであったが、彼らの多くは筆者に対して、「面接など受けたくない」気持ちや、「面接を受ける必要などない」という気持ちをストレートにぶつけてきて、面接中に感情を爆発させたり、途中で席を立ったり、さらには面接自体を拒否してしまうことも少なくなかった。通常の非行少年や犯罪者であれば、不満や怒りがあっても、自己の利益・不利益を考えてある程度はコントロールしながら表現するところ、これらの児童たちは、情緒や社会性が未熟であったりその偏りが大きいため、その場の感情のままに後先を考えず(考えられず)行動してしまうのである。こうした対象児童たちに対しては、言葉による治療的操作だけでは面接の三角形の構図を維持することができず、面接者と対象児童の一对一の対決、対立といった様相を帯びてしまうことが多かったのである。

そうした場面において、筆者が種々試みた対処方法の中で有効だったのは、「面接の構造を実体的に三角形にすること」であった。つまり、児童たちの感情の爆発等は言葉のレベルの操

作では統制できないので、治療者と対象者との間に、何らかの実体的な第三の存在を置くことで、治療者と対象者が二者関係に陥って正面から対立しないようにするのである。具体的には、コラージュを導入したり、キャッチボールや卓球を一緒にしながら話することなどが有効であった。

児童自立支援施設の入所児童のうち虐待児や軽度発達障害等の心理的な問題を抱える児童が入所する割合が増加したことを受けて、児童自立支援施設での心理的援助が大きな課題としてあげられている現状を鑑みても（全国児童自立支援施設協議会、2003）、こうした児童に対する心理療法的な援助技法が確立されることは急務であると考えられる。そこで、本論文では、筆者の実践のうち、コラージュ法を導入することなどが有効であった女兒との面接過程について考察することを通じて、情緒や社会性が未熟であったり、その偏りの大きい児童に対する、心理療法上の技法について検討したい。

3 事例の概要

（以下のプロフィール等は、プライバシー保護のため、事例の本質にかかわらないと考えられる範囲で改変してある）

（1）対象者のプロフィール等

対象者：15歳、女子（中学3年）（以下、「A子」とする）

主 訴：万引き、無断外出、飲酒、火遊び、喫煙、虚言等の問題行動

診断名：境界例、行為障害、広汎性発達障害

知能等：全検査IQ 85、言語性IQ 81、動作性IQ 92（WISC - III）

面接構造：治療者は少年鑑別所の職員であったが、児童自立支援施設の嘱託医である精神科医の指示により、毎週1回施設で心理面接を実施した（児童たちは、筆者の立場等を知っていた）。なお、本事例の児童は、定期的に精神科に通院し、投薬治療も受けていた。

（2）家族歴

原家族は、実父母とA子の3人家族。実父母は本人が出生3カ月後に離婚。実父の不倫が原因と実母は述べる。その後、実母は介護施設に勤務し、当直等がある変則勤務であったため、A子を母方実家に預け、祖父祖母の協力を得て育てた。小6時に建築関係の仕事をする継父と再婚。その6か月後、異父弟出生。

（3）生育歴

出産時、正常分娩で著患なし。実母によれば、始歩8か月、発語1歳半。2歳半でおむつが外れる。幼少時より人見知りはなく、多動。保育園時に指の皮むきがあった。また、小さい頃から、思い通りにならないと暴れるため他児と遊べない子であり、小4頃にはクラスで浮いている存在であった。小4時から運動部に所属。A子によれば、実母は幼少時から体罰を振るうことが多く、怒ると目つきが変わり、かなりひどく叩いたという。

（4）問題行動歴

小3時から虚言、友人とのトラブルがあった。小4時、親の財布からお金を持ち出すことや家出あり。A子によれば、母親がすぐに殴るので、家出したり、お金の面倒をかけたのだという。また、中学入学後、性経験をjする。キスやベッティングはあるが、セックスはした

ことがないという。さらに、中学入学後、親子けんかが激しくなり、A子が髪を染めたりしたことなどに対し、実母から、携帯を折る、ハンガーでたたくなどの体罰を加えられたという。A子は、「最初は叩かれると手を出していたが、きりがいいから手を出さなくなった。代わりに、財布からお金を抜き取ったり、家出したりする。」と述べている。中1の夏ころに家の金を持ち出して家出。他の県で補導される。中1の3学期には、万引きで通告があり、児童相談所で母子指導を開始。指導中も万引きで複数回補導される（A子によれば、万引きは日常的にやっており、外出時は財布を持たず、ほしいものがあれば万引きしていた。お金がある時でも万引きしていたという）。その後、火遊び（気に入らない中学の先輩の学具を燃やした）、公共物へのいたずら、飲酒・喫煙、中学での服装違反、遅刻、不登校などが続く。こうした問題が収まらず、児童自立支援施設に入所。

4 事例の経過

（以下、面接者を Th と略す。A子の言葉を「 」、Thの言葉を〈 〉で表す。）

(1) コラージュ実施に至るまでの経過

第1回 [面接] (200X年8月28日)

面接室で会ったA子は、中背で、ほっそりしており、神経質そうな印象であった。色白の顔立ちは整っているが、フレームの太い眼鏡をかけており、表情が読み取りにくい。背筋を伸ばし、あごを心持ち上げ気味にして、はじめから攻撃的な口調で応対してきた。

施設職員の話では、A子はカウンセリングを受けることを承諾したということであった。しかし、Thの立場等を説明し、〈規律違反が多いなど生活が落ち着かないようなので、そういったことを考えるためカウンセリングを実施するよう医師の指示があった〉など伝えると、「カウンセリングは受けたくない。」「よく知らない人に、いろいろ言われたくない。」「これまでカウンセリングは1回やったが、嫌だった。知らない人に自分のことをしゃべりたくない。」と拒否した。再度本人の意思を確認するが、「嫌だ。カウンセリングを受ける必要はないと思うから。他人からとやかく言われるほど、おかしくない。」など、最後まで拒否的な態度を崩さなかった。

第2回 [カンファレンス] (200X年9月11日)

本人が面接者との面接を拒否したので、A子の担当職員（40～50歳代の女性。以下、Bさんとする）とカンファレンスを実施した。

Bさんによれば、前回面接後、A子は「(Thが) 想像していた人と違っていた。」「いきなり初対面の人から、規律違反が多い、とか言われたらどう思う？」など不満を述べていたという。これまでも、A子は初対面の相手に攻撃的になることが多く、隠し持っていたはさみで面接者を威嚇したこともあるとのことである。Bさんは、笑いながら、Thに対する態度くらいなら、A子にはおとなしい方であるなど教えてくれた。

Bさんは、機会があればカウンセリングを受けるように本人を説得しているということであったので、あまり無理強いしないよう頼んだ。また、A子には、Thが怒ってないことを伝えてもらいたいとも伝えた。

第3回 [カンファレンス] (200X年10月16日)

再びBさんとカンファレンスを実施。最近のA子は、出所が現実化してきたことから精神的に安定し、前向きな態度が見られるという。また、施設として、「カウンセリングを受けることは医師の指示で、拒否できないことである。」との姿勢を保ちつつ、Bさんを中心に、「いろいろな人の意見を聞いてみたりすることも大切ではないか。」などと、機会をとらえてA子に働きかけているとのことであった。それを受けて、A子も、カウンセリングのことを気にすることが多くなり、Thが来所する日には、何かとThのことを気にしているという。

第4回 [面接] (200X年11月13日)

A子が面接してもよいと言っているということで、面接を実施した。この日のA子は眼鏡をせず、緊張した表情で面接室に座っていた。突っ張った言葉もあったが、声はか細く、震え気味で、聞かれたことにのみ答えるという感じであった。

面接を受けようと思った理由を問うと、「みんながやれやれと言うから。」と突き放すように答えた。それに対し、＜医師の指示であり、必要な面接である＞ことを伝え、＜とりあえず2、3回試しに面接をしてみないか＞と提案すると、うなずいた。以後の面接のやり方についていくつかの方法を提案したが、A子は「やったことがないから分らない。」と答えた。結局、A子が「テーマを決めて話すのが良い。」というので、次回のテーマについて、「退所してからやりたいこと。」を提案すると、「はい。」と同意した。

第5回 [面接] (200X年11月27日)

面接中は、イライラして突っかかってくるような態度だが、Thにしなだれかかってくるような様子も時々見られた。

前回、「退所してからやりたいこと」を今回のテーマに決めたことを確認すると、「忘れた。」とぶっきらぼうに答えた。Thはむっとしながらも、＜じゃあ、考えて、ここを出てからやりたいことを2つ3つ教えてください＞と質問した。本人が挙げたのは、①先輩や後輩と遊ぶこと、②眉や髪をいじること（長髪、金髪にしたい）、③携帯をいじる、の3つであった。＜生活に関することでは？（施設を出た後）下宿して、高校に行くつもりと聞いたけど＞と問うと、「微妙」という。＜お父さんのところ、お母さんのところ、どっちへ帰るの？＞と突っ込むと、「両親ともにいるんですけど（実父母は離婚。養父実母が保護者）勝手に別々にしないでほしいんですけど。」と食ってかかってきた。勘違いしていたと謝罪した上で、＜希望が変わったのはどうしたの？＞と問うと、「そんなことまで言わなきゃいけないんですか。関係ないでしょう」と反発してきた。

終了の時間が近づいた旨を告げると、勝手に退室しようとしたので、＜次回のテーマを決めたい＞と言うと、「話したいことなんてない」と言い放った。＜あなたがテーマを決めたら話しやすいと言ったんでしょ＞と言い返すと、「みんなが話せ話せというからでしょ。」と怒鳴ってくる。＜やるように言われているんだから、しょうがないでしょ＞とThも強い口調で返したが、A子はぶいと部屋を出ていった。

この面接の後、筆者は施設を訪れるたびに、他の児童との面接が終わった後など、施設のクラブ活動の時間に、A子その他の児童がバスケットボールやバドミントンをして

いる体育館に顔を出し、見学することを続けた。

(2) コラージュ実施後

第6回 [コラージュ作成1] (200X年12月18日)

BさんとThが話し合った上で、Bさんを通じて、Th、Bさん、A子の3人でやるコラージュに誘ったところ、A子が応じたということで、3人で同時にコラージュを作成することにした。

Thの司会の下に、50分程度でコラージュを作成（マガジンピクチャー法。雑誌はThが準備。台紙はA3）。作成後、Th→Bさん→A子の順に、作品を見せながら、題名と意図などを発表し、他の人が簡単にコメントするという手順で実施した。

面接室（年少児用の教室。木製の大きな机と椅子がある）に向かう途中、A子はThを意識している様子で、Bさんと世間話をしていた。着席し、〈それじゃあ、始めましょう。よろしくお祈いします。〉とThがあいさつすると、Bさんと一緒にA子も挨拶をした。Thが手順を伝え、〈こういう流れでやりたいんですが、いいですか〉と尋ねると、「どうでもいい。」など突っ張った発言をしたが、実際に作業に入ると、雑誌の写真を見ては「かわいい！」などと感激の声を発し続け、熱心に取り組んでいた。

作成後の鑑賞の際はA子は自らの作品に「クリスマス」とタイトルを付けた（図1）。「クリスマスが近いから」とのことである。「暖かい物」と題したThの作品には、ストレートに「好き」、Bさんの作品には「かわいい」とコメントしている。



図1 コラージュ第1回作品

第7回 [コラージュ作成2] (200X+1年1月22日)

A子は、初めのあいさつや終わりの挨拶をきちんとする。また、終了後の切りくず集めなども手伝ってくれる。Thに対しては、関心がありつつも、話しかけにくい様子である。相変わらず、ブライダル関係やインテリア関係の雑誌を見て、「かわいい」、「これ、いい」などと感激している。Bさんに「これ、かわいいでしょう」など軽い調子で話しかけながら、作成している。

自己の作品には、「将来の夢」とタイトルを付けた（図2）。「幸せな結婚をしたい」などと述べたので、〈作品に男の人が出てこないのは不思議だね〉と返すと、「いい相手がいない」

とぶっさらぼうに答えた。Thの作品のタイトルは、「過去と未来～こだわり」である。A子は、Bさんの作品には、「落ち着く感じ」、Thの作品には、「動きがある感じ」とコメントした。

Thに自分の好みの雑誌を買ってきてもらいたいと頼んできたので、できるだけ近い物を用意すると答えた。



図2 コラージュ第2回作品

第8回 [コラージュ作成3] (200X + 1年2月19日)

写真を見ながらの感激の声は大分減り、Bさんにいろいろ話しかけながら、作成している。Thに対しては、意識している様子だが、ほとんど話しかけてはこない。A子は自分の作品に、「あこがれ」とタイトルを付けた(図3)。<今度は男の人が出てきたね>とコメントすると、はにかんだような表情で、何も答えなかった。Thの作品のタイトルは、「今の気持ち～まとめないままで」、波線状に切り抜いた写真を張ったり、特に意味のない漢字を張ったり、いつもと違った雰囲気であった(Thがそういう気分であった)。Bさんの作品のタイトルは、「光と音」である。A子は、Bさんの作品には、「楽しい感じ」、Thの作品には「不思議な感じ。」とコメントした。



図3 コラージュ第3回作品

第9回 [コラージュ作成4] (200X + 1年2月26日)

A子の退所の予定の兼ね合いから、あらかじめ最終回であることは伝えてあった。A子は、雑談も減り、熱心に取り組んでいる。自分の作品には、「上機嫌～ちらばる想い～」とタイトルを付けた(図4)。写真を小片に刻んで、それを帯状に画面に貼るという工夫が見られたので、その意味を尋ねると、「今の気持ちだから。うれしい気持ちと、みんなバラバラになって、さびしい気持ちがばらばら。」など答えた。作品が素晴らしいと、BさんとThがほめると、恥ずかしそうな表情をしていた。Thの作品のタイトルは、「旅～驚き」、Bさんの作品のタイトルは、「明日も晴れ」。A子は、Thの作品には「暖かい感じ」、Bさんの作品には「楽しい、可愛い感じ」とコメントした。



図4 コラージュ第4回作品

5 考察

(1) 面接過程を概観して

A子は、「境界例、行為障害、広汎性発達障害」と診断されているが、生育歴等から見ると、その問題行動には虐待的な養育による影響が大きいのではないかと考えられる。対人関係、特に愛着対象との関係の持ち方の歪み、衝動統制の悪さ、外的な枠組みを軽視する傾向などが顕著であった。

心理療法においても、面接が軌道に乗るまでは、A子の強い感情的反発をうまく扱えず、途方に暮れるばかりの状態であった。しかし、施設職員の粘り強い働きかけと、面接における技法上の工夫がうまくかみ合って、コラージュ法を導入して以降は、それまでが嘘のようにスムーズに面接が進んだ。これは、出所のめどが立つという外的条件の影響もあったろうが、A子の様子などから、Bさんを交えた3人で行うコラージュ作成がA子にとって楽しいものであったことの効果も大きいと考えられる。作成したコラージュ自体についても、最初はやみくもに気に入った物を貼り付けていただけで、内容的にも構成的にも未熟さを強く感じさせるものであったのが、最終回には、創造性がきらめくような作品を作成するまでに至った。

また、A子が面接に応じたのは、担当職員を中心とした施設全体での粘り強い働きかけに

よるところが大きい。施設において心理療法が有効であるためには、それが施設全体の処遇の一環としてうまく位置づけられ、機能することが必要といえる（岩槻、岩谷、2004）。本事例の場合は、こうした連携がスムーズになされたことも、心理療法を実施する上で有効に働いたと考えられる。

（2）面接における三角形の構図について～①コラージュの導入

本事例では、治療者に対して怒りや不満をぶつけてくるA子に対して、実体的な三角形の構図を作るための手段として、第一に、治療者－A子という二者関係に、コラージュという第三の対象を持ちこむことを行った。

初回面接での、「(自分は) 他人からとやかく言われるほど、おかしくない。」という発言に象徴されるように、A子は心理療法等の個別面接を、自己のダメさ、悪さを突き付けられる場ととらえていたと考えられる。A子の自己イメージは否定的で、例えば第4回目の面接に垣間見られたように、内面は弱々しい人なのではないかと考えられる。A子が見せる過剰なほどの反発は、自分の弱さやダメさを見られまい・見せまいとする必死の抵抗であると考えられることができるだろう。また、Thは、本人が望んでいない面接を強要する周囲の圧力の象徴のようにとらえられていたともいえる。そうしたA子にとって、自己の問題点などを話題にすることもなく、自分の好きな写真を自由に台紙に張ってよいというコラージュは、「美的満足感と負担のない自己表現」（藤掛、2004、P.111）を行うことができる、「快樂の世界」（藤掛、前掲書、P.112）であったと考えられる。コラージュ作成第1回時の、自分の気に入った写真を見ながらのA子の、「かわいい！」という生き生きとした感激の声がとても印象的であった。

そしてまた、例えば、コラージュ作成2での治療者の「男の人が出てこないのが不思議だね」というA子の作品へのコメントがあって、コラージュ作成3で、男性が作品に登場したことや、コラージュ作成4のA子の作品には、コラージュ作成3の治療者の作品（写真を自由に活用すること）の影響が見受けられることなど、A子のコラージュ作品は、明らかに治療者の作品やコメントの影響を受けて変化してきており、コラージュという第三の存在を媒介としたA子と治療者とのコミュニケーションが生じていたことが見て取られる（例えば、杉浦、1999）。もちろん、それは治療者にも言えることであり、例えば、コラージュ作成3の面接は、治療者の中に、「これまでやってみたことがないことをやってみたいような」、「不思議な世界を構築したいような」奇妙な感覚を引き起こしており、それが作品にも現れていた。これはやはり、一種の逆転移と考えられるだろう。

（3）面接における三角形の構図について～②担当職員の参加

本事例では、第二に、治療者－A子という二者の関係に、施設の担当職員であるBさんという第三の存在を引き入れることで、実体的な三角形の構図を作ることも行っている。

これはコラージュを導入したことの効果にも関連するが、A子はまさしく二者関係の病理を抱えているといえ、対人関係を求める気持ちは強いのだが、相手に自己のわがまを一方的にぶつけるような振る舞いしかできないため、トラブルばかり引き起こしてしまうのだと考えられる。そうしたA子にとって、二者関係に陥らず、三者関係の中で自己表現を行うという心理療法における経験は、与えられた枠組みの中で自己を表現し、また他者と関係を持つ

つ練習となったのではないかと考えられる(杉山、2007)。Bさんは、A子と治療者が一対一の関係になることを防いでくれるとともに、あるときは治療者の代弁者として、あるときはA子の代弁者として、A子と治療者をつなぐという役割を果たしていた。

また、男性である治療者と女性であるBさん、そしてA子から構成されるこのグループは、疑似家族的な役割を果たしていたとも考えられる。実母による虐待が疑われる上、異父弟に実母をとられたという思いを抱いていたらしいA子にとって、一人っ子の立場に置かれたミニ・グループにおける経験は、家族の中で守られ、両親から十分に愛情を注がれるという経験を可能にし、愛着対象との関係を再構築する練習の場ともなったのではないかと考えられる。コラージュ場面におけるA子は、いつも、照れくさそうであり、またとてもうれしそうであった。

6 最後に

情緒や社会性が未熟であったり、その偏りが大きい児童に対して、面接における三角形の構図を作り・維持するための工夫について、事例を基に論じてきた。これらを通じて、心理療法の有効に行われるためには、治療者と対象者との関係は、対象者の病理に応じて変化しなければならないのだが、その治療者-対象者の関係の基本とされる三角形の構図そのもののあり方もまた、対象者の病理の水準に対応して、言葉のレベルの三角形の構図から実体的なレベルのそれまで変化しなければならないということが明らかになった。

参考文献

- 岩槻忠雄、岩谷宏一、2004、児童自立支援施設における心理的援助について 非行問題 69-76
 神田橋條治 1990 精神療法面接のコツ 岩崎学術出版
 神田橋條治 1997 対話精神療法の初心者への手引き 花クリニック神田橋研究会
 神田橋條治 2000 治療のこころ第二巻 花クリニック神田橋研究会
 藤岡淳子 2007 犯罪・非行の心理学 有斐閣ブックス
 藤掛明 2002 非行カウンセリング入門 金剛出版
 藤掛明 2004 非行臨床におけるコラージュの実践、高江洲義英、入江茂編芸術療法実践講座3
 コラージュ療法・造形療法 109 - 122
 全国児童自立支援施設協議会 2003 児童自立支援施設の将来像
 杉浦京子 1999 同時制作法 現代のエスプリ 386 70-71
 杉山登志郎 2007 子供虐待という第四の発達障害 学研
 遠山敏 1995 矯正・保護カウンセリング 日本文化科学社